

禅問答、防災計画 — 将来不安に向き合う —

ぶぎん地域経済研究所 専務取締役

土田 浩

激 暑が続いた長い夏がようやく終わった。この夏、私は禅の講座に通い、禅寺に泊まって修行体験をした。

禅の世界に一歩足を踏み入れたばかりの私だが、禅は修行の宗教だと言われる意味が少し分かったように思う。多くの宗教には超越的な神が存在し、神を信じ、委ね、祈ることで救われると説く。これに対して、禅には絶対的な神や教典がない。各自が厳しいトレーニングを積む中で自分と世の中の理解を深め、悟りに至ることで救われるという、自助努力の思想である。

禅僧が修行でいちばん辛いのは、禅問答だという。出題する老師にとっても、いちばん苦勞するのは禅問答の問を立てることだそう。正解などない問いに対峙して限界まで思考を凝らして相手に返すこと。事柄の本質に迫る問いかけで思考の嵐を巻き起こすこと。これこそが容易に決着をみない真剣勝負なのだろう。

人 間にとって将来とは不確実なもので、期待と不安を呼び起こす。日本の経済・社会には、少子高齢化と人口減少、財政赤字の累積、新興国の追い上げ、格差の固定化、孤独の問題といった将来不安が漠然と重く横たわっている。これが消費の節約や国内投資の抑制をもたらす根本的な原因であるとの声も多い。

こうした不安に対しては、正面から向き合う姿勢が大切ではないだろうか？ 避けて通れない問題に対しては、答えが見つかりそうになくても、禅問答のごとく精一杯自問自答

し、言葉にまとめて表に出す。それを繰り返すことで、守り抜くことは何か、捨てることは何かが徐々に明らかになっていく。

結論に至らない思考プロセスを世間に晒すのは無意味だとの批判はあるだろう。しかし、だからと言って、肝心な問題に耳を塞ぎ、口を閉ざしてしまえば、不安が増殖して一歩も前に進めなくなってしまう。

勿論、皆が天下国家を論じるのは荷が重い。企業、地域コミュニティ、職場のチーム、家族など各自が手の届く範囲で、先行き考慮すべき事柄を問い直してみてもどうだろう。責任ある立場の人は言うに及ばず、そこに関わるすべての人が自分事として考えることに意味がある。

では、どのような問答をすれば良いのか？ そう問われて私が思い起こすのは、防災計画を立案するプロセスである。被災想定をパターン化する議論の過程で、何がどうなることが自社の行動を左右するキーファクターかが浮かび上がる。継続業務を優先順位付けする議論の過程で、自社の本当の生命線は何か、手放すべきことは何かに気付く。

ここでいちばん大切なことは、出来るだけ多くの者を立案作業に巻き込むことだ。それぞれの立場から違和感や不安を全て口に出すこと。その対処法は皆で考える。この経験こそが、問題の本質と防衛ラインの位置を見極める智慧を生み出し、実際の危機発生時には、各現場で実質的なリーダーとして機能するのである。

近 未来の世界では、技術革新の成果が次々と社会に普及する。高齢化やグローバル化といった社会の変化に応じたニュービジネスも拡大する。成長の機会に恵まれた時代になるということだ。

そうした中で、将来に横たわる不安の種を直視し、一度皆で真剣に議論を尽くしてみる。これが、いまの日本に最も効果的な成長戦略ではないだろうか。